慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	原覚天編 経済援助の研究
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.7 (1966. 7) ,p.799(135)- 800(136)
JaLC DOI	10.14991/001.19660701-0135
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660701-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

田中敏弘著
『マンデヴィルの社会・経済思想――イギリス一八世紀初期社会・経済思想――』

わが国におけるバーナード・マンデヴィルにかんする研究は、河上肇氏によってはじめられ[1]、上田辰之助教授による本格的研究があらわれたことによって知られている。[2] わたくしはかつて、戦時中、ひそかに河上氏の著作をよみ、そのマンデヴィルについての先駆的研究に、マルクス主義者として以上に、経済思想史家としての氏に深い尊敬の念をおぼえたものであった。また上田教授の労作は、戦後の混乱期において、その含蓄にとむ文章と軽快な筆致は、読む者を最後までひきつけてやまないものがあった。こうした業績の上に立って、この度、田中氏によって、マンデヴィルにかんする本格的研究がまとめられたことは喜ばしい。

つぎのような内容から成っている。

第一章　マンデヴィルの生涯と思想の形成
第二章　マンデヴィルにおける人間と社会
第三章　マンデヴィルとバークリー
第四章　マンデヴィルとシャフツベリー
第五節　マンデヴィルとハチスン
第六節　マンデヴィルとアダム・スミス
第七節　マンデヴィルの経済思想
第八節　マンデヴィルとアダム・スミス
第九節　マンデヴィルとケインズ
補　論　研究史の概観

普通にマンデヴィルといえば、例の有名な「蜜蜂の寓話――私悪即ち公益」という奇妙な題目をもつ書物によって知られ、アダム・スミスの思想に非常に大きな影響を及ぼしたということが一般にいわれるが、しかしこの研究書をよむと、マンデヴィルのスミスへの影響は、そのような無媒介的な直線的なものではなく、実に複雑な経過を経たものであり、多くの屈折があることがわかる。すなわち、著者はつぎのようにいう。「マンデヴィルが、スミスの思想に重要な影響を与えたことはすでによく知られているところであり、

とくにスミスの経済的自由主義思想への影響は、著るしいとみられている。これに対して、マンデヴィルにより批判されたシャフツベリの倫理思想は、スミスの師ハチソンにより継承・発展せしめられ、スミスの思想形成にかなりの影響を及ぼしており、スミスの倫理学がシャフツベリ＝ハチスンの流れをくむ「道徳感学派」に属したことは周知のことである。……なぜシャフツベリが倫理学者であり、かつそれに留まったに対し、マンデヴィルがたんなる倫理学者でなく、経済思想家として広い意味において、スミスの先駆者たりえたかという問題である」（一〇九―一一〇頁）。ここにすでに問題はつくされているのであるが、マンデヴィルのスミスへの影響は、たんに経済的自由主義＝自由放任主義という思想的側面だけではなかった。のちに、スミスの「国富論草稿」にあらわれ、やがて「国富論」の冒頭における「分業論」にあらわれている。すなわち、スミスは、ピンのマニュファクチュアをとりあげているが、マンデヴィルの場合は時計製造業である。スミスが、マンデヴィルからいかに多くの影響をうけているかを、われわれは本書から学ぶことができる。著者は、マンデヴィルとスミスとの関係を、たんに、経済思想の面からだけでなく、シャフツベリとハチソンを媒介とする哲学的側面への影響についても充分な注意を払っている点、著者のひろく且つ深い学殖をうかがうことができる。経済学史および思想史の研究者の必読書というべきである。

（1）河上肇「経済学大綱」（改造社、経済学全集第一巻）。
（2）上田辰之助『蜜蜂の寓話――自由主義経済の根底にあるもの――』昭和二六年。（有斐閣・四一年四月刊・A5・三〇四頁・一六〇〇円）

―飯田　鼎―

＊　＊　＊

原　覚天編
『経済援助の研究』

最近経済援助の問題がふたたび多くの関心をもってとりあげられ、新しい角度から見直そうとする傾向が強く現われている。かかる反省・新展開の要請をもたらした要因には、種々なるものがあろうが、その主要なものは、第一回国連貿易開発会議における従来の「貿易よりも援助を」にとってかわる「援助よりも貿易を」の主張に象徴されているように思われる。

すなわち、一九五〇年代における援助・資本中心のアプローチの仕方が、十分なる低開発国の発展成果を生まず、援助理念・援助効果・援助方法に関する再検討が要請されているとともに、従来の低開発国に対する外国援助の増大がその対外債務の累積を招き、多くの低開発国において対外支払能力がいちじるしい悪化傾向を示した事実に対する反省として、貿易と資金援助とを有機的に結びつけることによってその外貨ギャップを解消しようとするいわゆる「貿易拡大のための援助」という考えの発展を示すものであろう。

そして、援助理念・目的に関しては、援助そのものを国家利益と国際協調のいずれに結びつけて考えるべきか、援助は経済的論理・合理性の追求にもとづくのではなくてむしろ別個の基準によって考慮さるべきではないのか、また援助効果に関しては、もっと効率的な資金配分を考慮し、いわゆる資本吸収能力ないし債務返済能力等のつっ込んだ研究が行なわれ、さらに、多数国の経済成長モデルを用いて計量的に援助効果を確定しようとする研究等が生まれている。

このような援助問題に対する新展開を背景としつつ、本書は、アジア経済研究所の昭和三九年度の調査研究計画の一環として、原覚天教授を中心に、十八名のメンバーによる共同研究の成果をまとめたものであり、その中心的な目的は、「従来先進諸国によって行なわれてきた経済援助が、供与国および被供与国それぞれにいかなる影響効果をもたらしたかということの検討と、今後における経済援助の政策決定にあたって規模・速度ならびにその性格をどのように考えるべきかということの研究にある」（四頁）。

とくに本書では、先進国側からの資金の流れの実態と、それぞれの機関別・項目別の資金の流動の目的意識を資料的に正確にとらえ、それとともに、援助効果および今後における援助の拡大の可能性とその方向について

も分析を加えようとしている。

したがって、本書の構成は、本論においては、概説と各国別研究（アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツ、ソビエトの五ヵ国の経済援助）よりなるが、そのどれもが、若干の例外はあるが、一、援助の理念と目的ないし歴史的背景、二、援助の実施状況、三、援助効果、四、援助の拡大の可能性と方向、の四節に分かれ、きちんと体系的に究明が行なわれている。そして考察対象期間は、一九五〇年以降資料入手が可能な最近までである。

とくにこのうちでも、序章の概説は、最近の経済援助の動向・援助効果分析の方法、主要な問題点、将来の方向づけに関するすぐれたサーベイとなっており、注目に値する。これを読めば、少なくとも援助に関する主要論点を把握することが可能であろう。

さらに付録の研究参考資料として、国際援助機関および各国の援助機関の組織機能と活動状況が十二章（アメリカ、米州開発銀行、イギリス、フランス、西ドイツ、カナダ、ベルギー、イタリア、オランダ、デンマーク、ノルウェー、国際開発援助機関の概要および援助機構）にわたり研究されており、本論における五ヵ国の分析とともに、貴重な資料となっているのである。

このように本書は、供与国側・先進国側に立ち、援助の理念・目的、実施状況、その効果、その拡大の方法を各国別・各機関別に考究した貴重かつ精力的な研究であり、資料的にもまた我々の考察の出発点・基礎として、大いに注目されねばならないのである。

しかし援助問題に関するつっ込んだ理念的ないし理論的究明には欠けており、また新しい援助方向を示唆しうるまでにはいたっていない。今後の援助問題研究の際の参考資料として重要であるとともに、我々はこういった地味な研究にもとづいて、新しい展開を求めての一層の考察をたゆまずすすめていかねばならないのである。（アジア経済研究所・アジア経済調査研究双書・第一二七集・A5・五五六頁・一七五〇円）

―深海　博明―

＊　＊　＊

隅谷三喜男著『日本労働運動史』

近年、わが国の労働運動に関する研究は徐々ながら進展を示しつつある。労働運動史研究については、その分野の特殊性から客観的研究と実践的活動の間に一線をひくことが難しく、また社会政策論なり労働経済論なりの社会科学としての体系化の遅れを反映して、これまで学界の共有財産としてその成果が十分蓄積されてきたとは決していえないように思われる。

しかし、著者もいう通り、今日「好むと好まざるとにかかわらず、労働運動を無視しては、現代日本を理解することはできない」のであり、それに対する理論的・歴史的・実証的研究の深化がまたれるところであった。本書は、かかる要請のもとで、明治初期より今日にいたるわが国の労働運動を著者なりの視角をもって通史としてまとめたものである。

著者は、本書をまとめるにあたって四つの留意点をはしがきに示している。そのうち「広く史料にあたること」、つまり実証性をもったものに仕上げることと、「運動史を分析する視角を定め、その視角から運動史を分析する方法をとった」ことが特に著者の力を注いだ点といってよいであろう。事実この点が本書の特徴であり、長所も短所もこの点に関連をもっているように思われる。

著者のいう分析視角とは、「一言でいえば労使関係の視角であり、具体的には、日本資本主義の発展に対応する賃労働の視点」ということである。しかし、著者はこの「賃労働の再生産構造……とかかわらせて、労働運動史を分析」するという視角については「その具体的方法は本書のなかに展開されている」というのみで、詳しい規定は行っていない。この点について、本書の中では、賃労働の創出それから再生産という面を意識からはずれぬよう努力し、それに関連して熟練・不熟練など労働力の質の展開にも目をむけていることはしれる。しかし、そのような賃労働の再生産構造とのかかわり合いということがたえず意識の中にあるとはいいがたく、時代がすすむにつれ、特に戦後についてはそのような視点が著しく稀薄になっている。それ故「賃労働の視角」が一貫して十分に展開され、それが成功しているかどうかについては疑問がのこるであろう。

さらに、本書では賃労働の視角ということから、労働運動を社会（主義）運動一般に解消せぬよう努力し、労働運動を独自的にとりあげ、それを一つの糸で結ぼうとしている。戦前のわが国にあっては労働運動が一般に社会（主義）運動の一分肢として展開されたのを反映して、研究自体も労働運動プロパーを扱うものはほとんどなかった。戦後にいたって、末弘厳太郎氏の労作が世に出たとはいえ、その後そのような方向が進展するまでにはいたらなかった。この点本書にみられる隅谷氏の努力は高く評価してよいであろう。もちろん、社会（主義）運動と不可分離にすすめられてきたわが国労働運動をそれと全く切り離して論じているわけではなく、両者の関連は的確におさえられている。それとかかわることで、わが国の労働運動の特徴の一つが、思想的には急進派と穏健派という形で、また政治活動か経済活動かということでもたえず両極に対立して抗争をくり返してきたことであるとされるが、それをとらえるにも従来よくみられた一方の立場の資料をもっぱら援用するという方法ではなく、「広く史料にあたる」という当初の姿勢を貫かれているように思われる。

ほかに時期区分も従来のものとは必ずしも一致したものではなく、氏の苦労がうかがえるが、個々の点でも従来の通説を否定して「冬の時代」における労働組合の存在を指摘したり、またアナ・ボル論争に新しい見解を示したりもしている。しかし、逆に氏が通説でなかったものとして、明治後期の労働運動と社会主義運動においてメンバーや内容が異なっていたという指摘のごとく、むしろ通説として理解されていたと思える点もあり、また小瑕瑾とはいえ、学術書としては誤字誤植も少いとはいえない。

しかし、いくつかの欠陥にもかかわらず、本書の意義は大きく、戦後世に出た通史としては末弘氏の著書と共にこれから最も広く利用されるものの一つとなるのではないかと思う。本書はそれに応えうるものといってよい